

試合時におけるガッツポーズ等を含む礼法の取扱い

北信越学生柔道連盟

柔道の根本原理は「精力善用」「自他共栄」である。

試合は上記原理を達成するために行う修行の一つであり、試合によってその道が完結するものではない。試合における対戦相手は敵ではなく、その修行をともにする同志である。その同志に敬意を払わずして、世に補益などできるはずがない。対戦相手には当然、敬意を払うべきである。

本連盟では、指導者・選手が柔道家としての品格の向上を目指すために、試合時におけるガッツポーズ等を含む礼法の取扱いを以下に定める。

1. 礼法

柔道試合における礼法については、講道館柔道試合審判規定では次の(1)(2)のように定められている。

(1) 趣旨

礼は、人と交わることにあたり、まずその人格を尊重し、これに敬意を表することに発し、人と人の交際をととのえ、社会秩序を保つ道であり、礼法はこの精神をあらわす作法である。精力善用・自他共栄の道を学ぶ柔道人は、内に礼の精神を深め、外に礼法を正しく守ることが肝要である。

(2) 立礼

直立（気をつけ）の姿勢をとり、上体を静かに曲げ（約30度）、両手の指先が膝頭の上・握り拳約一握りくらいのところまで体に沿わせて滑り下ろし、敬意を表する。この動作ののち、上体を起こし、元の姿勢にかえる。この間の時間は通常呼吸で約一呼吸（約4秒）である。

直立姿勢は、両踵をつけ、足先を約60度を開き、膝を軽く伸ばす。頭を正しく保ち、口を閉じ、眼は正面の眼の高さを直視する。両腕を自然に垂れ、指は軽くそろえて伸ばし体側に着ける。

※国際柔道連盟試合審判規定では、「全ての立礼は腰のところまで約30度の角度であること」と定められている。

(3) 礼は相手選手と揃えて行うように心がける。独りよがりな礼法にならないように注意をすること。

(4) 以下の礼が試合時には散見されるが、選手は厳に慎むこと。

ア) 膝屈伸のような（腕で上体を支える）礼

イ) 首を曲げるだけといった会釈に近い礼

ウ) 両手を腰にあてたまま行う礼

2. ガッツポーズ

(1) 勝ち名乗りを受ける前に行為を行った場合、主審は選手に服装を正させた後、口頭にて指導を行ったうえで試合を終了させることとする。

(2) 勝ち名乗りを受けた後に行為を行った場合、主審は選手が試合場内であれば呼び戻し、口頭にて指導を行う。

(3) すでに試合場内を出た後に目に余る行為を行った場合、主審は監督と選手の位置まで出向き、両者に注意を行う。

(4) 試合者ではない者（その他選手や応援者）が行った同様の行為に対しては、あまりにも目に余る場合に限り、審判員が合議の上、監督に対し注意を行う。

3. その他の感情表現

(1) 敗者は試合中に、畳を過度に叩いたりするなどの感情表現は控えること。主審は選手に整列を促し、服装を正させた後、口頭にて指導を行ったうえで試合を終了させることとする。

(2) 試合終了後、周囲の施設や物品に対しての八つ当たり行為を確認した場合、主審は選手を試合場内であれば呼び戻し、口頭にて指導を行う。試合場外であれば、主審は監督と選手の位置まで出向き、両者に注意を行う。

(3) 相手の人格を無視するような言動は勝負が決した後でも、従来どおり「反則負け」となる。

4. 審判員は選手に対する指導は公式の場で行うことを原則とする。上記2. 3の方法はあくまで参考とし、審判員の裁量で指導を行うものとする。